

# マクシモス、ディオニュシオス、トマス・アクイナス

——谷隆一郎訳註『難問集』との対話——

山本芳久

はじめに

谷隆一郎によって全訳された証聖者マクシモス（五八〇頃—六六二）の『難問集』<sup>(1)</sup>は、既に刊行されていた『人間と宇宙的神化——証聖者マクシモスにおける自然・本性のダイナミズムをめぐって』<sup>(2)</sup>と合わせて、我が国における教父研究に決定的な新生面を開くものと評価できる。

ギリシア教父の最大の古典の一つが読みやすい日本語に翻訳され、我が国における教父研究の第一人者である谷による骨太な見取り図も描き出されることによって、ギリシア教父の思想世界の真髄へと多くの読者が導かれていくこ

とが可能になったことはまことに喜ばしいことである。

谷は、これまで、証聖者マクシモスのみではなく、ラテン教父の代表者であるアウグスティヌス<sup>(3)</sup>や、ギリシア教父の一大頂点であるニュッサのグレゴリオス<sup>(4)</sup>についての本格的な研究を発表してきた。谷の研究の最大の特徴の一つは、細かいテクスト解釈に拘泥することなく、教父思想に通底する根源的な構造を骨太な筆致で描き出そうとしてきた点に見出すことができる。谷の翻訳や研究を通じて、教父思想の本格的な魅力へと導かれてきた読者は数多いことと思われる。

谷による一連の研究成果のこうした卓越性を踏まえたい

えて、我が国における教父研究に、ひいてはキリスト教研究全体に一つの刺激を与えることを意図しつつ、議論の材料として、本稿においては、あえていくつかの問題提起を試みてみたい。

そのさい、谷によるマクシモス解釈の特徴を浮き彫りにするための一つの補助線として、筆者の専門であるトマス・アクイナスとディオニュシオス・アレオパギテースをマクシモスと併置しながら、議論を進めていきたい。

マクシモスとトマスには、思想的に直接的な影響関係が見出されるわけではない。だが、東西の教父思想に通底する根源的なヴィジョンを別決してきた谷の思考枠組みの及ぶ射程は、キリスト教思想の最根源の本質を捉えようとするものであるかぎりにおいて、西方ラテン世界におけるキリスト教神学の最も卓越した大成者の一人であるトマスの神学との構造的な比較を試みることは大きな意味がある。

また、マクシモスもトマスも、ディオニュシオス・アレオパギテースの多大な影響下にある人物であり、それぞれによるディオニュシオス受容の在り方を比較考察してみることによって、ディオニュシオス、マクシモス、トマ

スという、キリスト教古典思想の代表者たちの思惟の特徴が、それぞれを孤立させて考察しているのみでは見えてこないような仕方でも浮き彫りになってくると思われる。

以下、このような観点に基づき、「神人的エネルギー」「神の受動性」「キリストの信」という、谷のマクシモス解釈の軸となっている三つの問題群を手がかりとしながら分析を進めていきたい。

### 一 「神人的エネルギー」とは何か

谷によるマクシモス解釈において強調されている重要概念の一つに、「神人的エネルギー」というものがある。たとえば、谷は、『難問集』の訳註の一つにおいて次のように述べている。

「神人的エネルギー」とは、ディオニュシオス・

アレオパギテース『書簡四』に由来する言葉であるが、証聖者マクシモスはそれを彫琢し、ゆたかに敷衍している。ここに、「同一の存在のうちに神のかつ神人的エネルギーを顕現させている」とは、まさにキリス

トの姿（キリストの真実）を語り出す表現である。キリストのうちには、「人間となった神の何らか新たな神人的エネルギー」が漲っているのだ。それゆえキリストにあつては、「ロゴスの受肉」と「人間の神化」とは実は同一の事態として現出していると言えよう。しかし、もとよりわれわれは、そうした「受肉」神化」なるロゴス・キリストの原範型的な働き、つまり「神性と人性とがヒュポシタシ的に結合した神人的存在」の「神人的エネルギー（働き）」に能う限り心抜き、それに何ほどか与りゆくほかないのだ。<sup>5)</sup>

谷のこの解釈から読み取ることができるのは、「神人的エネルギー (θεωποιον ενεργεια)」というディオニュシオスに由来する概念を谷が非常に高く評価しているという事実である。ディオニュシオスが編み出した「神人的エネルギー」という概念を、マクシモスは「彫琢し、ゆたかに敷衍している」のであり、人間はそれにこそ心を抜いていく必要があるというのが谷の解釈の眼目である。

だが、マクシモス自身は、本当にこの概念を高く評価しているのだろうか。マクシモスはこの概念についてたしか

に詳細に論じているが、それは、この概念を「彫琢」するためではないのではないだろうか。むしろ、この概念が持っている問題性を自覚したうえで、ディオニュシオスのテクストを、当時議論の対象となっていた異端的なキリスト論とは異なる仕方<sup>6)</sup>で解釈し直すためにこそ、この概念について詳細に論じているのではないだろうか。

そのことを明らかにするために、まず、ディオニュシオスがこの概念について述べている『書簡四』のテクストを引用してみよう。

イエスは人間だったのでなく、人間にあらざるものだったのでもありません。人間から出て、人間を超越し、真に人間を超えた人間となったのです。さらには、神に従って神のはたらきをなしたのでもなく、人間に従って人間のはたらきをなしたのでもありません。人間となった神として、私たちのために何か新たな神人的なはたらきを成し遂げたのです。<sup>6)</sup>

このディオニュシオスの言葉は、魅力的なものではあるが、曖昧なものであり、様々な解釈を呼び起こす余地のあ

るものであった。キリストには、人間としてのはたらきがあつたのでもなければ、神としてのはたらきがあつたのもなく、「神人的なはたらき」という第三のものがあつたとディオニュシオスは述べているように読むこともできるからである。

だが、このように読んでしまうと、キリストは「まことの神」であり「まことの人」であるという正統信仰から逸れることになってしまう。だからこそ、マクシモスは、「神人的エネルギー」に関するディオニュシオスのテキストを以下のような仕方で解釈し直すことによって、それを正統信仰の立場へと回収しようと試みているのである。

師〔ディオニュシオス〕は本質的に次のように言っている。〔…〕神のロゴスは、「人間となつた神の何らか新たな神人的エネルギー (θεωλογική ενέργεια) を、われわれのために働かせたのである。〔…〕〔キリストは〕同時に、神のかつ人間的に神的なわざと人間的なわざとを為して、あるいはより明らかに言えば、同一の存在のうちに、神のかつ人間的エネルギーを顕

現させているのである。<sup>(2)</sup>

このテキストにおいて読み取るべきことは、「神人的」というディオニュシオス固有の表現を、マクシモスは単に反復するのではなく、「神的なわざ」と「人間的なわざ」とに分節化し、この二つのわざが不即不離の仕方ではキリストにおいてはたらいいたと理解することによって、キリストには、神的な「一つのはたらき」「一つのわざ」しかないと考える「単働論 (monenergism)」の立場——「人間的なはたらき」が「神的なはたらき」にいわば吸収されてしまふと考える立場——とは明確に異なる仕方ではディオニュシオスを解釈しようとしているという事実である。

「単働論」は、カルケドン会議後に生まれてきたキリスト論に関わる異端であるが、ディオニュシオスの「神人的エネルギー」という概念は、こうした異端の立場にその理論的根拠を与えるものともなっていた。そのため、マクシモスは、「神人的エネルギー」という概念によってディオニュシオスが意図していたのは、「神的なはたらき」と「人間的なはたらき」との不即不離な協働のことであつて、「神人的エネルギー」という一つのはたらきがある

わけではないと理解することによって、カルケドン信条に立脚する自らの正統的な立場を闡明するとともに、優れた神学者であるディオニュシオスが異端的立場へと回収されてしまうのを防ごうと尽力しているのである。<sup>8)</sup>

そもそも、『難問集』という著作は、ナジアンゾスのグレゴリオスとディオニュシオスの著作のなかにおける難解な箇所を的確に解釈することによって正統信仰の立場を闡明することを目指した著作である。優れた教父の著作であつても、その難解な箇所を不適切な仕方で解釈してしまうと、異端的な立場が生まれてくる危険性がある。その危険性が現実化することを防ぐために執筆された『難問集』の訳注においても、『人間と宇宙の神化』においても、谷は、正統的立場にも異端的立場にも理論的根拠を与える可能性のあつた難解な——または曖昧で両義的な——ディオニュシオスのテキストをマクシモスが正統信仰の立場に引き寄せる仕方で解釈しようとしていて、という事実を明確に踏まえたうえで論を展開することをしていない。そのことによつて、マクシモスとその置かれた歴史的状况のなかで試みようとしていた神学的営為の意義が曖昧になつてしまつていのではないだろうか。

「神人的エネルギーガイア」という概念は、解釈次第では「単働論」という異端的立場へとつながつてしまう危険な概念だということ指摘することなしに、「神人的エネルギーガイアへの参与」という類の言い方を谷のような仕方でも用いることは、マクシモスが『難問集』において達成したことの意味を希薄にしてしまうことにつながつてしまうのではないだろうか。このような疑問は、「神の受動性」に関する谷の解釈に触れることによって、さらに増幅していく。

## 二 神は動かされるか

谷のマクシモス解釈において特徴的な二つ目の点は、「神の受動性」を肯定している点、すなわち、神が「動かされる」ことがありうるものとしてマクシモスの見解を理解している点に見出される。全知全能の神を徹底的に能動的な存在として捉え、その受動性を否定するのが伝統的なキリスト教神学に共通する基本的な立場であるという事実を考慮すると、谷によつて解釈されたこのようなマクシモスの立場は、大いに驚きを与えるものである。だが、

マクシモスは本当にこのような立場に与<sup>よ</sup>っているのだろうか。問題となるマクシモスのテクストは次のようなものである。

神的で偉大で聖なるディオニュシオス・アレオパギテースは、このことを探究して捉え、次のように問うている。「神学者たちは神的なものを、欲求(愛)、愛、欲求されるもの、そして愛されるものなどと呼んでいるが、それらによってそもそも何を指し示そうとしているのか」と。ディオニュシオスは次のように言う

て、ロゴス(言葉、論)を見定めている。「一方によっては動かされ、他方によっては動かす。」そして、より明らかに言えば、神的なものと愛は、一方では欲求として「動かされる」。しかし他方、欲求されるもの、愛されるもの(神的なもの)は、欲求と愛とを受容するすべてのものを自らのものと、「動かす」のである。

そしてディオニュシオスは、再び明らかにこう言う。神的なものと愛とは一方では、欲求と愛という内的な状態をもたらすものとしては、欲求と愛を受容する人々によって「動かされる」。そして他方、神的な

ものは、それ自身へと動かされる人々の欲望・欲求(φείσιν)を、自然・本性的に引きつけるものとしては「動かす」のである<sup>(9)</sup>。

このテクストにおいて、マクシモスは、ディオニュシオスの難解なテクストを解釈しようとしているが、そのディオニュシオスのテクストとは、『神名論』第四章第十四節 173-174における次のようなものである。

神学者たちが、或る時には「神を」「愛(ἀγαπή)」や「愛情(ἀγάπη)」と呼び、他の時には「愛されるもの(ἀγατούς)」「愛情を受けるもの(ἀγαπητός)」と呼ぶのは、一体何を意図しているのだろうか。神は一方「愛・愛情」についてはその原因でありいわば製作者であり生む者である。他方については、神そのものがそれ「愛されるもの・愛情を受けるもの」なのである。「神は」一方によっては動かされ、他方によっては動かす。もしくは自らを自らによって導き動かすものなのである<sup>(10)</sup>。

ディオニュシオスのテクストを見れば、神が「動かされる」ことがあると彼が語っていることは明白である。だが、どのような意味で神は「動かされる」と言っているのか。そのことを問題にしているのが右に引用したマクシモスのテクストである。谷はこのテクストに訳註を付しつつ、次のように述べている。

神的なものが「動かし」かつ「動かされる」ということは、神的エネルギーとこの世界、この身との関わりの機微として重要な論点を含んでいる。この点、『雅歌』の表現を用いて言えば、花嫁（人間）が花婿（神）の「愛の矢」に貫かれて、「愛の傷手」を受けたことは——それは「信」という魂・人間の善きかたち」の成立でもあろうが——、その方へと「神が動かされること」であろう。が、他方、そうした「愛の傷手」から今度は花嫁たる人間が、姿を隠している（無限なる）花婿たる神をどこまでも愛し求めてゆくことは、そのように「神が動かすこと」であろう。つまり、この有限な世界への「神の脱目的な脱在（ヤハウエ・エヒエ）は、「神が動かされること」（ある種の受動）

であり、神への「人間の脱目的かつ自己超越的な愛」は、神が人間を自らへとひきつけ「動かすこと」（能動）とされよう<sup>11</sup>。

「ある種の」という留保を付けてはいるものの、谷は、神の受動性を明確に認めており、かつ、それがマクシモスの立場でもあると解している。だが、マクシモスは本当にそのようなことを主張しているのであろうか。解釈の決定的な鍵となるのは、右に引用したマクシモスのテクストの後半にある次のテクストである。

神的なものと愛とは一方では、欲求と愛という内的な状態をもたらすものとしては、欲求と愛を受容する人々によって「動かされる」。

「動かされる」というディオニュシオスのテクストを敷衍しつつ、マクシモスは、神の受動性を容認しない方向で解釈を進めているということがこのテクストから読み取ることができる。ディオニュシオスは、神的なもの（神）が「動かされる」という表現を使っているが、実際に神が

神以外のものから受動的な仕方では「動かされる」と考えているわけではない。神が「欲求と愛を受容する人々によって動かされる」という言い方が可能だとしても、実際には神はそこにおいて受動的な役割を果たしているのではなく、「欲求と愛という内的な状態をもたらず」という能動的な役割を果たしているとマクシモスは解しているのだ。

マクシモスのこのような姿勢は、次のテクストにおいても顕著である。

神的な誤りなきロゴスを真摯に受け取った聖人たちはすべて、魂の歩みを世のいかなる喜びによっても支えられないことなく、この世を通り過ぎていった。そして彼らは、神についての諸ロゴスを——それは神の善性 (*γαβότης*) と愛 (*ἀγάπη*) のことだが——、人間にとつて接近しうる頂点として真実に凝視している。そこで彼らは次のことを教えられている。すなわち、それらによつて神は動かされて、諸々の存在物に「在ること」を与え、「善く在ること」 (*ὁ ἐν εὐαρίᾳ*) を恵み与えるのだ。(唯一不動なる神について、意志ではなく動き (*κίνησις*) を語ることが許されるとすれば、神は

万物を動かし、「在ること」へと引きつけ保持する。しかし神自身(の実体・本質)は決して動かされないのだ。<sup>(12)</sup>

このテクストにおいて、マクシモスは、たしかに、神が「動かされる」ことに言及している。他方、末尾の文においては、「神自身は決して動かされない」とも述べている。この二つの言明はどのように両立しているのだろうか。末尾の文において述べられているのは、「神」と「万物」との関係である。そして、「神」は「万物」を動かすが、「神」が「万物」から動かされるということは、けつしてないと述べられている。換言すれば、神が被造物(谷の言葉を用いて言えば「この世界、この身」)から動かされることはありえない。

それではなぜ、マクシモスは、神が「動かされる」と述べるのだろうか。神は何によつて「動かされる」のだろうか。答えは明確である。神は「神の善性と愛」によつて動かされる。すなわち、神は自己自身を動かす。一見神の受動性を主張しているように見えるマクシモスのテクストは、最終的には、神の受動性の主張とは解しえない。被造物との関係において神が受動的な立場に置かれることはありえ



ず、一見「受動性」を主張しているかのように見えるテクストも、神（の善性）が自己自身（神自身）を動かすという、神の徹底的な自発性を意味しているのである。

このように理解するのが正しいとするならば、「この有限な世界への『神の脱目的な脱在』」は、『神が動かされること』（ある種の受動）だと解釈する谷の理解を肯定することはできない。「有限な世界」との関係において神が受動的な位置に立つことをマクシモスはけっして容認していないからである。谷の解釈は、神の受動性を主張しているかのようにも見えるディオニュシオスの曖昧で問題含みのテクストを、神の不受動性という伝統的なキリスト神学の根本命題と両立する仕方で解釈し直そうとしているマクシモスの知的作業の意義を希薄にするものになってしまっているのではないだろうか。

### 三 トマスのディオニュシオス解釈

ディオニュシオス・アレオパギテースの神学的営みの積極的意義を東方キリスト教世界において正面から受け止めた代表的な人物の一人が証聖者マクシモスであるとするな

らば、西方キリスト教世界におけるディオニュシオスの代表的な受容者の一人は、トマス・アクイナスである。マクシモスとトマスは、正統信仰の擁護者として、東西のキリスト教を代表する人物である。両者のディオニュシオス受容は、その基本的な点において通底しているものと言えるのだろうか。それとも、そこには、何らかの多様性が見出されるのであろうか。右に論じてきた「神人的エネルギー」と「神の受動性」という二点に関して、以下、そのことを明らかにしてみたい。

まず、「神人的エネルギー」の方から見よう。トマスは、『神学大全』第三部第十九問題第一項において、「キリストのうちには、神性と人間性とのただ一つのはたらきがあるのか」という問いを立てている。そして、この項の異論解答一において次のように述べている。

ディオニュシオスが、キリストのうちに神人的な (theandrica) —— すなわち神の・人的な (divina-*virtus*) または神的一人間的な (divina-humanana) —— はたらき (operatio) を指定しているのは、両方の本性のはたらきまたは力の何らかの混同によるのではない。そうで

はなく、キリストの神的なはたらきが彼の人間的なはたらきを使用し、そして人間的なはたらきが神的なはたらきの力を分有していることによるのである。<sup>13)</sup>

このテキストにおけるトマスのディオニュシオス解釈は、私以上に解釈したかぎりにおけるマクシモスのディオニュシオス受容と軌を一にするものであることは極めて明白である。すなわち、「神人的」というディオニュシオスに由来する言葉をそのまま使おうと、「神性と人間性とのただ一つのはたらきがある」という単働論的な誤解を与えてしまう可能性があるので、トマスは、「神人的」という言葉を説明抜きにそのまま使用することはしない。そうではなく、「神的なはたらき」と「人間的なはたらき」とが共に存在したうえで、両者が不即不離の仕方で協働するということをディオニュシオスは語っているのだという方向で解釈することによって、正統信仰と合致する仕方でのディオニュシオスのテキストを位置づけようとしているのである。

事情は、「神の受動性」に関するディオニュシオスのテキストについても同様である。トマスは、神が「愛」とも「愛されるもの」とも呼ばれるという上掲のディオニュシ

オスのテキストについて、以下のような註解を加えている。

神が「愛 (amor)」や「愛情 (dilectio)」と言われるのは原因的な仕方による (causative)。というのも、神は、他の諸々のものに愛を発散し、或る種の類似性に基づいて、何らかの仕方ですれらのものの中に愛を生むかぎりにおいて、愛の原因だからである。他方、神が「愛されるもの (amabilis)」愛情を受けるもの (diligibilis)」と呼ばれるのは、本質的な仕方による (essentialiter)。というのも、神それ自身が「愛されるもの」「愛情を受けるもの」だからである。そして、(ディオニュシオスは) この解決の根拠を示している。というのも、愛は、それによって或る愛する者が動かされるところの運動 (motus) を意味している。それに対して、「愛情を受けるもの」とは、この運動によって動かすところのものを意味しているのである。ところが、神には、「他の諸々のものを」動かし、それらのものの中に運動を引き起こすことが属しており、こうして「愛されるもの」であることが属しているよ

うに思われるのであり、他のものうちに愛を創造するるのである。

このテキストにおいてトマスが述べていることは、多少込み入っているが、単純化して言えば、他のものから「動かされる」という意味における受動性が神に存在することを否定するものとなっている。誰かが何かを愛するとき、その者はその愛の対象の魅力によって惹きつけられ、動かされている。その意味において、「愛は、それによって或る愛する者が動かされるところの運動を意味している」と言える。そうであれば、神は「愛」という言葉で呼ばれる以上、神には「動かされる」ことがあるということになるのかと言えは、そうではない。神は被造物によって動かされることはない。「神が動かされる」というディオニュシオスの表現は、神自身が被造物によって受動的に動かされるということを意味しているのではない。そうではなく、諸々の被造物がそれによって動かされるところの「愛」を与える者として、すなわち「動かされる」という被造物の在り方を与える原因として、「動かされる」という述語が「原因的な仕方で (causativer)」神に述語づけられているに

過ぎないとトマスは述べているのである。

このような解釈がディオニュシオスの真意を捉えたものといえるのか否かという点に関しては、ディオニュシオスの残したテキスト群の全体を踏まえただうえでの更に慎重な研究が必要になると思われる。だが、少なくとも、本稿において問題にしている『神名論』のテキストに関するトマスの解釈は大筋においてこのようなものであり、神の受動性を否定するものとなっている。

本節において明らかにしたトマスのディオニュシオス解釈の分析によって浮き彫りになってくるのは、前節までにおいて分析したマクシモスのディオニュシオス解釈とトマスのディオニュシオス解釈とは、基本的な方向性において通底する部分が極めて大きいという事実である。「神人的」という言葉に関しても、「神の受動性」に関しても、異端的であつたり、キリスト教神学の伝統的な見解とは異なっていたりする方向で解釈することも不可能ではないと思われるディオニュシオスのテキストを、できるかぎり伝統的な正統の見解と一致する方向性において解釈しようとする姿勢がマクシモスとトマスに共通しているのである。

他方、「神人的エネルギー」という概念を留保なしに

使用することに対してマクシモスが抱いている警戒感を強調せず、この概念を多用したり、「神の受動性」をマクシモスが認めているかのように解釈する谷の解釈の方向性が正しいとしたならば、マクシモスとトマススのディオニュシオス解釈にはかなりの隔たりがあるということになるであろう。そして、トマスという補助線を立てることによってより顕著な仕方で浮かび上がってくる谷のマクシモス解釈とトマスがその代表者の一人である伝統的立場との極めて重要な相違点として最後に注目してみたいのは、「キリストの信」というテーマをめぐる問題である。

#### 四 キリストに「信仰」は存在するか

谷のマクシモス解釈において強調されている点の一つは、キリストが神への全き「信」を有していたという点である。「人間と宇宙的神化」においては、次のように述べられている。

受肉の信・信仰とは、その原初的な成立場面に関する限りは、「かつて」ではなく、つねに「今」のこと

である。そして、このことは畢竟、使徒たちのイエス・キリストとの出会い・瞬間（カイロス）の場面にまで遡行してゆく。（……）このように使徒たちの経験（つまり、信という魂のかたち）を捉えるとき、それは同時に、イエス・キリスト自身、信と分かち難く結びついていることになろう。その際、注意すべきは、イエス・キリストにあつては、父なる神への全き聴従と信が存し、それゆえ神化と受肉が同時に現成している、と信じられたのである。<sup>(15)</sup>

このように、谷は、キリストが人間の信仰の対象になるのみではなく、キリスト御自身が神に対する信・信仰を有していたことを強調し、この箇所において次のような註を付けている。

バルタザールによれば、イエス・キリストはその存在自身が「信・信仰（*ἰστις*）そのもの」であり、われわれの信の「模範」であるという。これは、「イエス・キリストの信」（*ἰστις Χριστοῦ Ἰησοῦ*）（ローマ三・二二、三・二六、ガラテア二・一六、三・二二）、エフェソ

三・二二、フィリピ三・九」という語句を、「キリスト自身  
の信の働き・わざ」として（いわゆる主格的属格として）  
解することであつた。<sup>(16)</sup>

新約聖書の様々な箇所において登場する *πιστις* 'hpois  
*Xpou* という語句における属格は、文法的に言えば、主  
格的属格としても、对格的属格としても理解することがで  
きる。主格的属格として理解すれば、「イエス・キリスト  
が有する信仰」という意味になり、对格的属格として理解  
すれば、「イエス・キリストへの信仰」「イエス・キリスト  
に対する信仰」「イエス・キリストを信じる信仰」という  
意味になる。

たしかに、文法的にはどちらの理解も可能ではあるが、  
キリスト教神学の伝統においては、この箇所は、基本的  
に、对格的属格として理解されてきた。日本語訳の聖書を見  
ても、新共同訳、フランシスコ会訳、口語訳、新改訳など、  
代表的な聖書のすべてが、「イエス・キリストへの信仰」  
や「イエス・キリストを信じる信仰」といった訳語をあ  
てている。

なぜ对格的属格として理解されてきたのかと言えば、古

代末期の教義論争の結果として、キリストは単に人間であ  
るのみではなく同時に神でもあるという捉え方がキリスト  
論に関する正統教義として確立した以上、神であるキリス  
トが神を信じる必要があるかのような印象を与える  
「イエス・キリストが有する信仰」という主語的属格に基  
づいた解釈は退けられざるをえなかつたからである。

この点に関しても、トマス・アクイナスの見解を参照し  
てみよう。トマスは、『神学大全』第三部第七問題第三項  
において、「キリストのうちには信仰 (fides) が存在した  
か」という問いを立て、次のように解答している。

信仰の対象は、見られない神的事柄である。  
〔…〕 神的事柄が見られないということがなくな  
れば、信仰という特質も排除される。ところが、キリス  
トは、後に明らかにするように〔第三部第三十四問  
題第四項〕、その受胎の最初の瞬間において、神を本  
質において十全な仕方で見えていた。それゆえ、キリス  
トのうちには信仰は存在しえなかつたのである。

キリストは、受胎の瞬間から神を完全に認識する「至福

者 (beatus)」であり「把握者 (comprehensor)」であり、神をありありと見ていたがゆえに、見ていない事柄に関わる「信仰」という不完全な在り方を有することはなかった。「キリストは神であり人間であったということに基づいて、彼の人性においても、はじめから直ちに至福であったというように、他の諸々の被造物を超え出る何ものかを有していたのである」<sup>17)</sup>。

τῆς τοῦ Ἰησοῦ Χριστοῦの属格を主格的属格として解釈することと関連して谷が参考文献として挙げているのは、「Fides Christi」と題されたバルタザールの論考と清水哲郎『パウロの言語哲学』<sup>18)</sup>である。だが、この両者の論考が、マクシモス解釈の文脈において参照すべき的確な先行研究といえるのかという点については疑問が残る。

バルタザールの論考は、伝統的な神学において Fides Christi という語句が「キリストに対する信仰」として理解されてきたという事実を熟知したうえで、あえてそれに抗しながら Fides Christi を「キリストが有する信仰」として理解するという構成を取ったものである。清水の論考についても同様のことが言える。清水は次のように述べている。

パウロはユダヤ教徒として育った人である。イエスをキリストと看做すグループ(のひとつ)に入っても、彼は自らをユダヤ教から別の宗教へと改宗したとは考えていない。「……ユダヤ教内にとどまっている限りは、イエスをメシアとし、神が遣わされた者に全権を委託された者というような位置づけはできるとしても、イエスを信仰の対象とし、あるいは神とすることは無理だったことは想像に難くない」<sup>20)</sup>。

一読すれば明らかのように、清水の論考は、現代聖書学の知見に依拠しながら、イエスを「神」とみなす伝統的なキリスト論を相対化するものとなっており、イエスが「神」であることを否定すること、「イエス・キリストを信じる信仰」という対格的属格に基づいた解釈を否定することとがひとつながりのものとなっている<sup>21)</sup>。

カルケドン公会議で確定した、イエスが「まことの神」であり「まことの神」であるという正統教義を徹底的に擁護することに生涯を捧げたマクシモスのキリスト論を理解するさいに、キリストは「神」であるという伝統的な教義

## 終わりに

を相対化する仕方で構成されている清水の論を援用することは適切なやり方と言うことができるだろうか。谷は清水の論について、「同方向での詳しい考察」と述べているが、マクシモスのキリスト論と清水のキリスト論が同方向のものであるとみなすことは困難と言わざるをえない。

キリストを、単に人間であるのみではなく同時に神であるとみなす正統教義の徹底的な擁護者であるマクシモスにおいて、「キリストの信」（キリストが神に対して有する信）が語られているとみなす谷の解釈を正当化するマクシモス自身のテキストは、管見に入るかぎり、『難問集』のテキストのうちには見出されないように思われる。もしもそのようなテキストが見出されないのだとすれば、谷の解釈はどのようにして正当化されるのであろうか。またもしもそのようなテキストがマクシモスのうちに見出されるのだとすれば、マクシモスを正統的なキリスト論の擁護者とみなすことはできるのであろうか。マクシモスをキリスト教思想史のなかに的確に位置づけていくための議論の叩き台として、このような問題提起をしておきたいと思う。

我が国における教父研究、とりわけギリシア教父の研究がここまで進展して来るにあたって、谷による数々の研究や翻訳が果たしてきた役割は極めて多大なものである。西方ラテン教父とりわけアウグスティヌスの研究と比べて著しく立ち遅れていた東方ギリシア教父の思想世界に日本語で馴染むことが可能になったことに関して、最も大きな役割を果たしてきた一人が谷であることについては、衆目が一致するところであらう。本稿において展開してきた考察も、谷によるマクシモスの翻訳と研究がなければ、そもそも存在することすらできなかった類のものである。

とはいえ、我々とは異なる時代に、我々とは異なる言語で思索を展開した一人の古典的な思想家が真に受容されて我々自身の思索のための不可欠な構成要素となっていくためには、それが翻訳され、専門や立場を異にする多くの読者の共同作業を通じて読み解かれていくことが必要である。

そのような共同作業を進めていくためのささやかな最初の一步として、本稿においては、筆者の専門であるト

マス・アキイナスの神学をも一つの手がかりとしながら、我が国随一のマクシモスの専門家である谷隆一郎氏のマクシモス解釈にいくつかの疑問を呈させていただいた。本稿には多くの瑕疵が含まれているかもしれないが、マクシモスを一つの中心とする東方ギリシア教父の思想が、一部の専門家の枠を超えて、活発な哲学的・神学的な議論の対象となっていくための叩き台として、その一助となれば幸いである。

(東京大学准教授)

## 註

- (1) 証聖者マクシモス『難問集—東方教父の伝統の精華』谷隆一郎訳、知泉書館、二〇一五年。
- (2) 谷隆一郎『人間と宇宙的神化—証聖者マクシモスにおける自然・本性のダイナミズムをめぐって』知泉書館、二〇〇九年。
- (3) 谷隆一郎『アウグステイヌスの哲学—「神の似像」の探究』創文社、一九九四年。
- (4) 谷隆一郎『東方教父における超越と自己—ニュッサのグレゴリオスを中心として』創文社、二〇〇〇年。
- (5) 証聖者マクシモス『難問集—東方教父の伝統の精華』谷隆一郎訳、知泉書館、二〇一五年、四八二頁、訳註(39)。
- (6) デイオニュシオス・アレオバギテース『書簡集』月川和雄訳、上智大学中世思想研究所編訳・監修『中世思想原典集成3 後期ギリシア教父・ビザンティン思想』所収、一九九四年、四七一頁。訳語を部分的に変更した。
- (7) 証聖者マクシモス『難問集—東方教父の伝統の精華』三〇—三一頁。なお、以下、『難問集』からの引用は本書に基づいている。なお、傍点は原文(谷の翻訳)のものである。また、特にことわりのないかぎり、「」内は引用者(山本)による補いである。〔…〕は引用者による省略を意味している。以下同様。なお、ギリシア語のテキストおよび英訳に関しては、以下のものを参照した。Maximos the Confessor, *On Difficulties in the Church Fathers: The Ambigua*, edited and translated by Nicholas Constas, Dumbarton Oaks Medieval Library; 28-29, Harvard University Press, 2014.
- (8) 単働論に対する反駁という観点からマクシモスの神学的営みを分析した優れた論考として、以下の研究を参照されたい。Demetrios Bathrellos, *The Byzantine Christ: Person, Nature, and Will in the Christology of Saint Maximus*



*the Confessor*, Oxford University Press, 2004.

- (9) 証聖者マクシモス『難問集——東方教父の伝統の精華』二五一頁。
- (10) デイオニュシオス・アレオパギテース『神名論』からの引用については、以下に記載するトマスの註解書に収められているギリシア語原文より訳出した。S. Thomae Aquinatis Doctoris angelici O.P., *In librum Beati Dionysii De divinis nominibus: expositio*, cura et studio Ceslai Pera; cum introductione historica Petri Carmello et synthesi doctrinali Caroli Mazzantini, Taurini: Marietti, 1950, C. IV.1, xi, n.444.
- (11) 証聖者マクシモス『難問集——東方教父の伝統の精華』五二—五三頁、訳註(104)。
- (12) 証聖者マクシモス『難問集——東方教父の伝統の精華』一八八頁。なお、このテクストの末尾の文には( )が付されているが、訳者による補いではない。翻訳の底本になっている *Patrologia Graeca*, V. 91 の原文ギリシア語テクスト自体に付されているものである。また、( )の実体・本質)に付されている「」は、引用者ではなく、訳者による補いである。
- (13) なお、『神学大全 (*Summa Theologiae*)』のテクストは、最も権威のあるレオ版を使用した。Sancti Thomae Aquinatis Doctoris Angelici Opera Omnia Iussu Impensaque Leonis XIII P. M. Editi, Tomus IV-XII, 1888-1903.
- (14) S. Thomae Aquinatis Doctoris angelici O.P., *In librum Beati Dionysii De divinis nominibus: expositio*, cura et studio Ceslai Pera; cum introductione historica Petri Carmello et synthesi doctrinali Caroli Mazzantini, Taurini: Marietti, 1950, C. IV.1, xi, n.444.
- (15) 谷隆一郎『人間と宇宙的神化——証聖者マクシモスにおける自然・本性のダイナミズムをめぐって』三〇九頁。傍点原文。
- (16) 同書三四〇頁。
- (17) トマス・アキナス『神学大全』第三部第三十四問題第四項本文。
- (18) Hans Urs von Balthasar, "Fides Christi": An Essay on the Consciousness of Christ," in *Explorations in Theology 2, Spouse of the Word*, translated by A.V. Littledale with Alexander Dru, Ignatius Press, 1991, pp.43-79.
- (19) 清水哲郎『パウロの言語哲学』岩波書店、二〇〇一年。
- (20) 同書一〇六一—一〇八頁。
- (21) なお, *εὐλογία* 'ἰσοὺς Χριστοῦ' という表現をめぐる現代聖書学における代表的な論考の一つとして以下のものを参照されたい。リチャード・B・ヘイズ『イエス・キリストの信仰——ガラテヤ3章1節—4章11節の物語下部構造』河野克也訳、新教出版社、二〇一五年。ヘイズは、主格的風格として解する立場に立っている。

(22) 谷隆一郎『人間と宇宙的神化——証聖者マクシモスにおける自然・本性のダイナミズムをめぐって』三四一頁。